

### ●三面川の鮭文化

三面川は、昔から鮭との関わりが深く平安時代初期の『延喜式』には、越後國の鮭が朝廷に献上された記録が残されており、旧村上城下の人々からは、「母なる川」や「イヨボヤの川」と呼ばれて親しまれ、三面川に鮭が遡上する時期になると現在も伝統漁法である居継り網漁が行われており、この漁をする光景は初冬の風物詩となっています。

江戸時代当時、村上藩では、年貢米とともに様々な種類の雜税がありましたが、三面川の鮭漁は、村上藩の管理のもと町人に対し入札制で行われ、落札した請負人が納める運上金は、村上藩の大好きな収入源となっていました。間部詮房が村上城主として入封した享保2年(1716)の運上金は、304両と銭6貫560文でしたが、その後、漁獲量が年々減少し元文元年(1736)には、5両3分となり入札を止めざるを得ない事態となつたことから村上藩の下級武士であった青砥武平治を中心に鮭が多く捕れるための研究が行われ、鮭が産卵のために生まれた川へ帰つてゐる「母川回帰」の習性に着目し、鮭が産卵しやすいうようにするための分流「種川」を整備することで、鮭の漁獲量は次第に増加し運上金の額も漸次増加しました。この分流を整備する「種川の制」は、世界初の鮭の自然ふ化事業と考えられています。また、明治11年(1878)に内務省農林局(現農林水産省)の金田帰逸の指導を受け、村上藩士族は育卵場と称する孵化場を建設し、その孵化場では、三面川で漁獲した鮭から採卵し孵化させ、翌年春に三面川へ放流しており、この三面川の鮭の人工ふ化事業は、日本では最初のことであったとされています。村上藩の財政を支え、明治時代以降の村上本町(旧武家町)、村上町(旧町人町)の発展に大きく寄与した三面川の鮭は、江戸時代から現在に至るまで、この地域の人々にとって重要な自然の恵みであり、それ同時に、村上城下では鮭を大切に思ふから多様な鮭の文化や生業を育んできました。村上城下の鮭を用いた代表的な郷土料理「塩引き鮭」は、当地域特有の気候と風土により時間かけてじっくりと発酵熟成してできるものであり他の地域では真似できません。塩引き鮭を作る過程でも、城下町ならではの加工方法が現在も用いられており、鮭を吊るす際には頭を下に向ける腹を切る際には腹の全てを切らず一部を残す「止め腹」が用いられています。これは頭を下に向けることで首つりの連想を避けることと切腹を忌んだものといわれています。

三面川の畔に建つイヨボヤ会館では、初冬の時期になると塩引き鮭を作る体験イベント「越後村上三ノ丸流鮭塩引き道場」を開設し、歴史的建造物が多く現存する出羽街道沿線の庄内町の通りでは「塩引き街道」と称し町家の軒下に吊るされた塩引き鮭を間近で見ることができます。

上「村上鮭育卵場の図」  
下「三面川鮭居継り網の図」

## 村上 遺産 まち歩き城下絵図

MURAKAMI HERITAGE



村上市は、新潟県の最北部に位置し、北東部は朝日飯豊連峰の山々が連なり、西部は50kmにも及ぶ美しい日本海の海岸線が続く水と緑にあふれる自然豊かな地域です。当地域は、村上城の城下町を中心に出羽街道、三国街道中通り、米沢街道等の街道沿線の宿場町や集落、荒川や石川等の河口に北前船の寄港地として栄えた港町等が形成され発展した地域で、これらの町や集落には歴史的な建造物が現存し歴史的な町並みも数多く残っています。また、それらの町や集落では、地域固有の歴史や文化的な資源を活用した村上堆朱や村上茶、岩しな布などの産業や村上まつりや岩船まつり等の祭礼行事、習俗等が現在も受け継がれており歴史や文化を感じることができます。

### ●村上城下町の歴史（成り立ち）

保安元年(1120)	右大臣中御門宗忠の日記『中右記』に小泉庄(現村上市)の名が見える
永万元年(1165)	瀬波川(現三面川)の鮭漁について院宣が出る
建永元年(1206)	本庄氏の祖である秩父氏が小泉庄の地頭として下向
永正6年(1509)	『靈樹山耕雲寺納所方田地之帳』に村上の地名が初めて見える
天文9年(1540)	本庄繁長が猿沢より本庄城(村上城)に移る
天正18年(1590)	本庄繁長が村上領を没収され直江兼続の弟大國実頼が本庄城主となる
慶長2年(1597)	上杉氏が『越後國瀬波郡絵図』を作成 ※村上町軒数252軒
慶長3年(1598)	豊臣秀吉の命で村上頼勝が加賀小松から入封し城下町の基礎を整備
元和4年(1618)	堀直吉が越後長岡から入封し城普請とともに城下町を整備
元和6年(1620)	堀直吉が江戸藩邸で栽培されていた茶の種子を移植し栽培
寛永10年(1633)	村上町の大年寄徳光屋左衛門が宇治より茶の種子を買い求め栽培
寛永16年(1639)	西余弥羽黒神社が現在地に造営され村上まつりが始まる
慶安2年(1649)	堀氏により「村上御着到」が作成され、塗師の名が初めて見える
寛文3年(1663)	松平直吉が播磨姫路から入封し城下町を拡張
寛文7年(1667)	村上城天守(三層唐破風付き)が再建
元禄2年(1669)	落雷により村上城天守が焼失 ※以後、天守は再建されず
宝永2年(1705)	三面川の鮭漁が運上制となる
享保2年(1717)	本多氏により「村上十五万石御領内」の帳が作成される
享保5年(1720)	※村上城下軒数831軒
寛政9年(1797)	徳川家宣、家繼の側用人であった間部詮房が上野高崎から入封 徳川家康の異母弟内藤信成を祖とする内藤氏信が入封し、以後幕末まで内藤氏が統治
文化15年(1818)	この頃までに三面川の鮭の自然増殖システム「種川の制」が整備される
嘉永2年(1849)	浄念寺本堂が建立される
安政6年(1859)	藤基神社社殿が建立され、有磯周斎が墨刻を施す
慶応4年(1868)	滝波重兵衛が山城宇治より職工を雇い宇治茶の製法を導入 村上藩、奥羽越列藩同盟に加盟し新政府軍と交戦、村上城落城するが城下は戦火を免れる
明治4年(1871)	廢藩置縣により村上藩から村上県となり、のちに新潟県に統合
明治11年(1878)	孵化場を建設し日本初とされる鮭の人工ふ化事業を実施
明治22年(1889)	市町村制施行により村上城下が旧主族の村上本町と旧町人の村上町の二町となる
大正3年(1914)	羽越線の新發田一村上間が開通し村上駅開業
昭和21年(1946)	村上本町と村上町が合併し村上町となり村上城下が一町となる
昭和29年(1954)	村上町、岩船町、瀬波町、山里町、上海府村が合併し村上市が誕生
平成20年(2008)	村上市、荒川町、神林村、朝日村、山北町が合併し新村上市が誕生

この「まち歩き城下絵図」は、平成28年10月に主務大臣より認定を受けた「村上市歴史的風致指向計画」に基づく歴史まちづくり事業の一環として作成したもので、この計画は、村上市ホームページにて公開しています。

発行日：平成30年1月（改訂：平成31年1月）発行者：村上市都市計画課



# まち歩き城下絵図 (明治初年村上城下絵図)

## 施設や店舗、交差点名を手掛かりに古地図を使って町並み散策

村上城下町区域内には、城下町以後に新設整備された道路もありますが、城下町当時の地割（道路の形態）が色濃く残っていることから、寛政年間（1789～1800）に測量したものをもとに作成された明治初年村上城下絵図に公共施設や当地域固有の歴史を感じる店舗、交差点を加筆した古地図を作成しました。



### 仏 九品仏

村上城下の九品仏（石仏）は、1ヶ所にまとまって設置されていないことが特徴で、城下の入り口など9箇所に設置されています。この石仏は、宝暦8年（1758）に光徳寺の最晉善理上人が、村上城主内藤氏の家祖、内藤信成の150回忌供養のため村上城下及び瀬波町に発願建立したもので、九品は、極楽浄土にある九つの階級であり、極楽往生するといずれかの浄土にいくことができるといわれており、九品仏はその浄土にいる阿弥陀の来迎の姿とされ、上品上生から下品下生までの九つの姿は印（手の形）の結び方が異なっています。



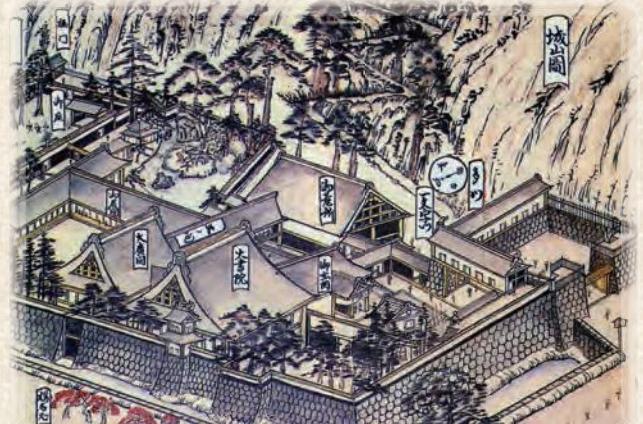
※村上城下町区域内には、8体の九品仏が設置されており、残りの1体は、旧瀬波町内の旧出羽街道沿いに設置されています。



### 凸 村上城

村上城は、村上城下町（現市街地部）の東側に位置する標高135mの臥牛山に築かれた平山城で中世から近世を通じて揚北地方（現新潟県下越地方）の中心的な役割を果たしていた城郭です。築城時期は不明ですが16世紀初期に国人領主である本庄氏が猿沢村（現村上市猿沢）から現在地に本拠地を移した頃と考えられています。中世期に臥牛山東面に築かれた腰曲輪や堀、土塁、井戸跡などの遺構とともに、江戸時代前期に村上城主として入封した村上氏や堀氏により大規模な城普請により山上一帯に整備された本丸の天守台跡や二ノ丸の乾櫓、巽櫓、埋門、出櫓、平櫓等の石垣跡、三ノ丸には月見櫓、鞍櫓、千貫丸等の石垣跡が残り、石垣は最大で高さ8m近くに及ぶものもあります。このほか、山下には城主居館跡や下渡門の堀跡、藤基神社境内の土塁跡の一部なども残っており、中世と近世の城郭が混在した城郭です。なお、村上城跡は中世から近世の城館跡として平成5年（1993）6月に国の史跡に指定されています。

※村上城主であった松平直矩や柳原政倫、本多忠孝は、播磨姫路から移封又は転封した城主であり村上城は世界遺産である姫路城とも関係のある城郭です。



### ★六斎市

六斎市の起源は、村上本町町長の命を受け一人の職員が中条町（現胎内市）の衣料品店に出店を頼み、大正8年（1919）4月に1軒の古着屋が三之町通りに開店したことが起源とされています。翌年には、100軒ほどの店舗が立ち並び、市も賑いをみせ、その後は、月6回開設される六斎市として定着しました。現在も、毎月2と7のつく日に村上市役所脇の市道に地場の新鮮な野菜や鮮魚、特産物、日用品などの店舗が約60店舗立ち並びます。